



2023年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2024年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み」～「かなり高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「平年並み」：約2年に1回程度の発生頻度

「かなり」：約7年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジ：東シナ海では沖合域、沿岸域とも前年・平年を下回る。
日本海では前年並みで、平年を下回る。
- (2) マサバ：東シナ海では沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。
日本海では前年を下回り、平年を上回る。
- (3) ゴマサバ：東シナ海では沖合域は前年を下回り、平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を下回る。
- (4) マイワシ：東シナ海では前年並みで、平年を上回る。日本海では前年並みで、平年を下回る。
- (5) ウルメイワシ：東シナ海では前年並みで、平年を上回る。
- (6) カタクチイワシ：東シナ海では前年を上回り、平年を下回る。

※「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門(横浜) 上原

漁況：浮魚資源部(長崎) 大下、依田

海況：海洋環境部(長崎) 渡邊、種子田、井桁

電話：095-860-1600(長崎)、ファックス：095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

予報対象海域

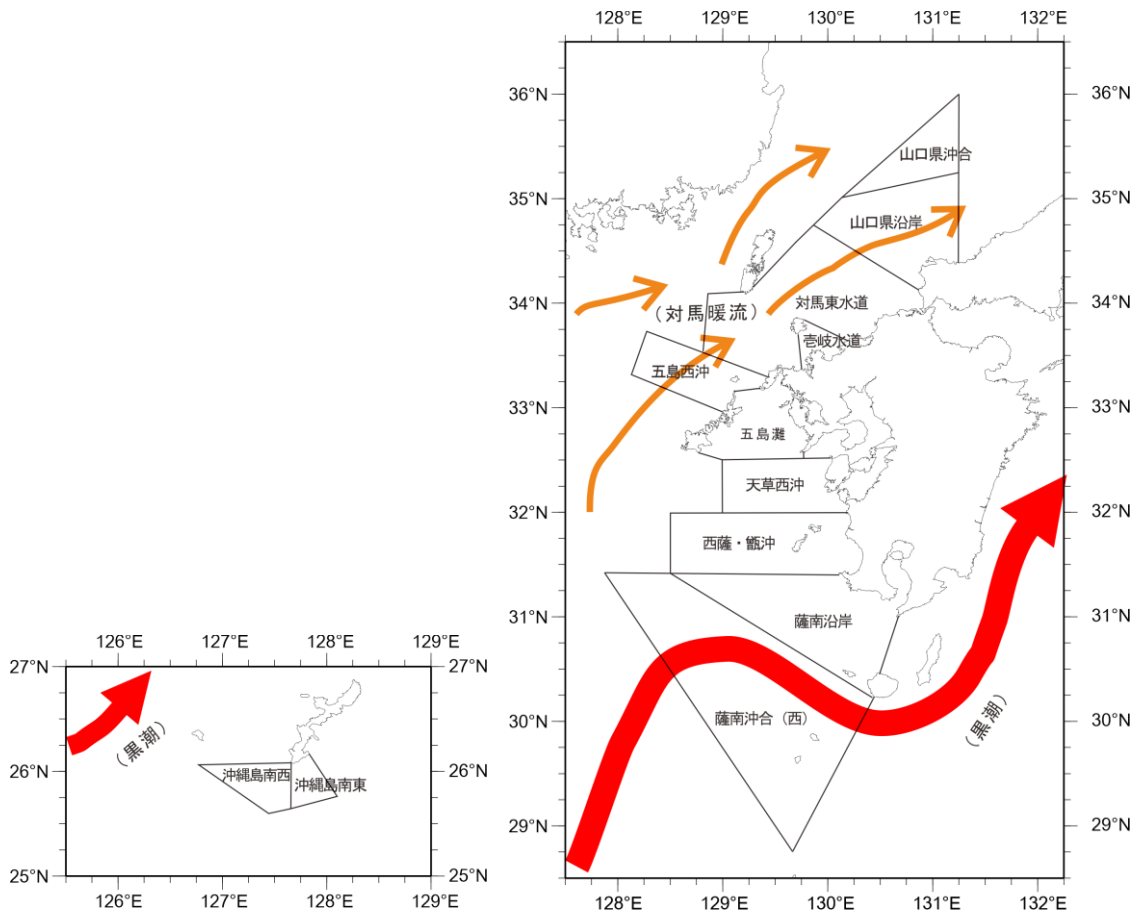


図1. 海況 (沿岸)

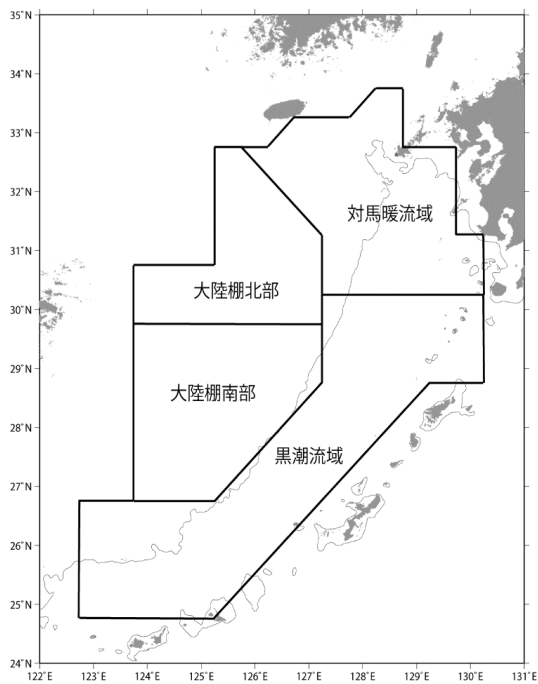


図2. 海況 (沖合)

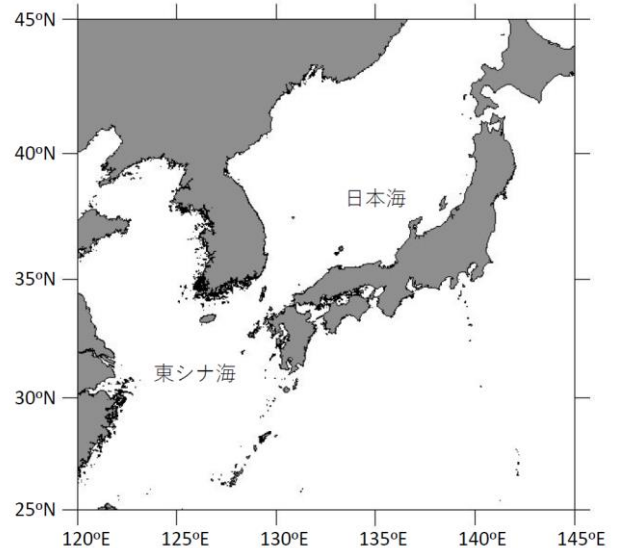


図3. 漁況

東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域

日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2024年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、大陸棚上、黒潮流域は「やや高め～かなり高め」、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2023年10月～2024年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10・11月「かなり高め」、12・1月「やや高め」、2月「かなり高め」。

南部：10月～12月「かなり高め」、1月「やや高め」、2月「かなり高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、11月は「接岸傾向」、12月～2月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

(2) 海面水温

10月～2月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12月「平年並み」、1月「かなり高め」、2月「はなはだ高め」。

山口県沿岸：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12月～2月「やや高め」。

対馬東水道：10・11月「かなり高め」、12・1月「やや高め」、2月「平年並み」、3月「やや高め」。

壱岐水道：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12・1月「やや高め」、2月「平年並み」、3月「やや高め」。

五島西沖：11月「かなり高め」。

五島灘：10月「やや高め」、11・2月「平年並み」、3月「やや高め」。

天草西沖：10月「やや低め」、1月「平年並み」、3月「やや高め」。

西薩・甑沖：1月「平年並み」、3月「やや高め」。

薩南沿岸：1月「平年並み」、3月「やや高め」。

薩南沖合：1月「やや高め」、3月「平年並み」。

沖縄島南東：10月「かなり高め」、11・3月「やや高め」。

沖縄島南西：10月「かなり高め」、11・3月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月～12月「平年並み」、1月「かなり高め」、2月「やや低め」。

山口県沿岸：10・11月「平年並み」、12・1月「やや高め」、2月「かなり低め」。

対馬東水道：10月～1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

壱岐水道：10月「平年並み」、11月「やや高め」、12・1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「かなり低め」。

五島西沖：11月「平年並み」。

五島灘：10・11・2・3月「平年並み」。

天草西沖：10月「やや高め」、1月「平年並み」、3月「やや低め」。

西薩・甑沖：1・3月「平年並み」。

薩南沿岸 : 1・3月「平年並み」。
薩南沖合 : 1・3月「平年並み」。
沖縄島南東 : 10月「平年並み」、11月「やや低め」、3月「平年並み」。
沖縄島南西 : 10・11月「やや低め」、3月「平年並み」。

3. 現況 (2024年3月中旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「やや高め」、南部「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「やや低め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2024年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2024年級群（2024年生まれ））、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小・中銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：15～22cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と22cm以上の2歳魚以上（小・中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2023年11月～2024年1月）および見通し（2024年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移し、2022年の資源量は46万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回った。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2023年11月～2024年1月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、東シナ海中部であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は3千トンで前年（2022年11月～2023年1月、2千トン）並みで、平年（4千トン）を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚（2022年級群）と17cm以下の0歳魚（2023年級群）であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表2）。漁獲の主体は17～22cm

の1歳魚（2022年級群）、17cm以下の0歳魚（2023年級群）であった。

3. 今後の見通し

資源評価や直近の漁況より、2022年級群の豊度は2021年級群並みとみられる。調査船調査の結果やこれまでの漁況からは2023年級群の豊度は2022年級群を下回るとみられる。2024年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における親魚量は安定していることから、2023年級群並みと見積もるのが妥当であろう。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）と2歳魚（小・中銘柄）が漁獲の主体で、3歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。前年の漁況は沖合域、沿岸域ともに平年並みであった。漁獲の主体となる1歳魚の豊度は前年を下回るとみられることから、沖合域、沿岸域ともに来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。前年の漁況は平年を下回った。漁獲の主体となる1歳魚の豊度は前年を下回り、0歳魚の年級豊度は前年並みとみられることから、来遊量は低調だった前年並みで平年を下回ると考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2024年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2024年級群（2024年生まれ））、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島西、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33～35cmの2歳魚（小銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年を下回り、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33cm以上の2歳魚以上（小・中銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2023年11月～2024年1月）および見通し（2024年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加した。2019年・2020年は加入量が減少したが、2021年以降は回復し、2022年の資源量は51万トンと推定されている。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降、8万～10万トンの水準である。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2023年11月～2024年1月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万1千トンで前年（1万9千トン）並みで、平年（1万5千トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は18～27cmの0歳魚（2023年級群）と28cm以上の1歳魚（2022年級群）以上であった。

ただし、大中型まき網漁業や長崎県の沿岸漁業では、TACによる制約などのため、マサバの漁獲を自粛した期間があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を上回った（表2）。漁獲の主体は21～27cmの0歳魚（2023年級群）と28cm以上の1歳魚（2022年級群）以上であった。ただし、大中型まき網漁業および島根県の沿岸漁業では、TACによる制約などのため、マサバの漁獲を自粛した期間があった。

3. 今後の見通し

今年度の資源評価結果や2023年秋以降の小銘柄の漁況から判断すると、2022年級群の豊度は近年では多かった2021年級群並みとみられる。2023年秋以降の豆銘柄の漁況から判断すると、2023年級群の豊度は2022年級群並みとみられる。2024年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2023年級群並みとみられる。0～2歳魚が漁獲の主体であることから、系群全体の豊度は前年並みと考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないものの、安定した漁獲がある。前年の漁況は沖合域、沿岸域ともに平年並みであった。沖合域、沿岸域とも、前半は1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みとみられることや2023年秋以降の好漁から判断して、沖合域、沿岸域とも来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないが、過去2年のように平年を大きく上回る年もある。沖合域、沿岸域とも、前半は1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0～2歳魚の豊度は前年並みとみられる。来遊量は特異的に好漁だった前年を下回るが、2023年秋以降の好漁から判断して、平年を上回ると考えられる。

ゴマサバ東シナ海系群の漁況予報

今後の見通し（2024年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2024年級群（2024年生まれ））、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年を下回り、平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島灘・薩南、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～37cmの1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2023年11月～2024年1月）および見通し（2024年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、10万～20万トン程度で推移し比較的安定していた。近年は、2015年以降増加傾向を示し、2018年には21万トンに達したが、2019年に急減した。2021年から再び増加し、2022年は16万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降5万トン前後で推移していた。近年では2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2022年は2万9千トンであった。

2. 漁況の経過

2023年11月～2024年1月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中部と五島灘・薩南、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万1千トンで前年（1万9千トン）並みで、平年（1万5千トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年、平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を下回った（表1）。20～40cmの0歳魚（2023年級群）以上が漁獲された。

ただし、大中型まき網漁業等では、TACによる制約などのため、ゴマサバの漁獲を自粛した期間があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2022年級群の豊度は2021年級群並み、2023年級群の豊度は2022年級群並みとみられる。2024年級群の評価は難しいが、資源評価における2023年の親魚量は微増と予測されるため、2023年級群並みと考えられる。

例年、4月～9月期は沖合域では1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲量の大半を占める1歳魚の年級豊度は前年並みであるが、直近の漁況を考慮すると、沖合域の来遊量は好調であった前年を下回り、平年並みであると考えられる。沿岸域では1歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。沿岸域の来遊量は、直近の漁況を考慮すると、前年並みで、平年を下回ると考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2024年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2024年級群（2024年生まれ））、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は主に15～22cmの1～3歳魚（中・大羽銘柄）が、後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主体に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部～中部、後半に日本海西部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は16～22cmの1～3歳魚（中・大羽銘柄）主体に、後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主体に漁獲される。

注：「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2023年11月～2024年1月）および見通し（2024年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じた。

東シナ海・日本海における我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後も増加傾向にあり、2022年は7万1千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2023年11月～2024年1月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を上回り、平年並みであった（表1）。海域別に見ると、佐賀県以南において前年を上回った。漁獲の主体は、11～15cmの0歳魚と17～20cmの1歳魚以上であった。

(2) 日本海

2023年11月～2024年1月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を下回った（表2）。漁獲の主体は10～14cmの0歳魚と15～22cmの1歳魚以上であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2021年級群の豊度は2020年級群並みで、2022年級群の豊度は2021年級群並

みとみられる。また、当歳魚を対象としたトロール調査より、2023年級群の豊度も2020～2022年級群と同等と考えられる。2024年級群の豊度の評価は難しいが、親魚となる1歳魚以上の来遊状況を示す直近の漁況から判断すると、2023年級並みか上回ると考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響され、0歳魚の漁況は冬季における親魚の来遊量に依存すると考えられる。直近の漁況より、2024年の親魚の来遊量は前年並みであることから0歳魚豊度は前年並みと考えられるため、東シナ海の前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量に強く影響される傾向がある。2月以降の漁況より、1歳魚以上の来遊量は前年並みと考えられる。年級群豊度と直近の漁況を考慮すると、漁期前半における来遊量を構成する1～3歳魚（2021～2023年級群）の豊度は前年同期の1～3歳魚（2020～2022年級群）並みと考えられることから、日本海における来遊量は前年並みで、平年を下回ると考えられる。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2024年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2024年級群（2024年生まれ））、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半が漁獲の主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2023年11月～2024年1月）および見通し（2024年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年に2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後減少して、2022年の資源量は9万1千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国の漁獲量は、1976年から1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017年以降の漁獲量は3万1千～3万9千トンの間で変動し、2020年は1万9千トンと大きく減少したが、2022年は4万2千トンと回復した。

2. 漁況の経過

2023年11月～2024年1月の鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は15～20cmの0歳魚（2023年級群）を主体に20cm以上の1・2歳魚（2022・2021年級群）も漁獲された。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期には1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となる。2023年11月～2024年1月の漁況の経過および中層トロールの調査結果から、2023年級群の豊度は2022年級群並みと考えられる。2024年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚となる2023年級群が前年並みと見られることから、2023年級群と同程度と考えられる。したがって、全体の来遊量は前年並みで平年を上回ると考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2024年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2024年級群（2024年生まれ））、1歳魚（2023年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年を上回り、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：4月～6月が主体となる。長崎県南部以南の沿岸域が主な漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は5cm以上の0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が主体で、漁期後半は4～8cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2023年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2023年11月～2024年1月）および見通し（2024年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1995年以降増加傾向を示して1998年には42万6千トンに達したが、2001年～2005年には19万トン前後まで減少した。資源量は2007年には30万2千トンとなったが、その後減少し、2022年には10万7千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンであった。2016年以降は減少傾向にあり、2022年には3万8千トンとなった。

2. 漁況の経過

2023年11月～2024年1月の鹿児島県～山口県地先における漁獲量は不漁であった前年を上回り、平年を下回った（表1）。漁獲の主体は、2023年11月は5cm以下の0歳魚秋季発生群（2023年級群）と10～15cmの1歳魚（2022年級群）、12月は3～8cmの0歳魚春季発生群（2023年級群）、2024年1月は8～10cmの1歳魚（2023年級群）であった。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期の前半は0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主体に漁獲される。2023年4月～9月の漁況等から、2023年の春季発生群の豊度は2022年の春季発生群を下回ると考えられる。また2023年10月～2024年1月の漁況等から、2023年の秋季発生群の豊度は2022年の秋季発生群を上回ると考えられる。2024年の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2023年の春季発生群並みであると仮定する。2023年後期の漁獲量が前年を上回ったことを考慮すると、全体の来遊量は低調であった前年を上回り、平年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2023年11月～2024年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	漁獲量は734トンで、前年・平年並みであった（前年比92%、平年比92%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は52トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比169%、平年比9%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は869トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比178%、平年比56%）。
熊本 牛深港	漁獲量は164トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比68%、平年比90%）。	漁獲量は648トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比59%、平年比113%）。	
長崎	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は2,199トンで、前年・平年を下回った（前年比53%、平年比70%）。	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は6,812トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比111%、平年比153%）。	
佐賀	漁獲量は130トンで、前年・平年を上回った（前年比208%、平年比127%）。	漁獲量は13トンで、前年・平年を下回った（前年比45%、平年比38%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は34トンで、前年・平年を下回った（前年比25%、平年比37%）。漁獲のうち、小銘柄が15%、中銘柄が77%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は11トンで、前年・平年を上回った（前年比262%、平年比129%）。	代表港中型まき網漁獲量は9トンで、前年・平年を下回った（前年比69%、平年比27%）。漁獲のうち、中銘柄が主体であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は154トンで、前年・平年を上回った（前年比122%、平年比263%）。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は48トンで、前年・平年を下回った（前年比22%、平年比24%）。	中型まき網漁業の漁獲量は33トンで、前年・平年を下回った（前年比34%、平年比25%）。	

注：「前年」は2022年11月～2023年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は97トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比542%、平年比78%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は5トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比3,016%、平年比29%）。	主要4港のまき網による漁獲量は598トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比171%、平年比98%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は55トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比1,185%、平年比67%）。	主要4港のまき網による漁獲量は83トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年漁獲なし、平年比92%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は27トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比681%、平年比65%）。
熊本 牛深港	漁獲量は153トンで、前年・平年を上回った（前年比2,659%、平年比503%）。	漁獲量は693トンで、前年・平年を上回った（前年比185%、平年比162%）。	漁獲量は251トンで、前年・平年を上回った（前年比697%、平年比140%）。
長崎	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は84トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比466%、平年比65%）。	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は386トンで、前年・平年を下回った（前年比43%、平年比41%）。	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は739トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比155%、平年比111%）。
佐賀	漁獲量は5トンで、前年・平年を上回った（前年比14,600%、平年比240%）。	漁獲量は1トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比1,138%、平年比58%）。	漁獲はなかった。
福岡	代表港中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比41%、平年比11%）。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。
山口	棒受網・すくい網の漁獲量は0.2トンで、平年を上回った（前年の漁獲なし、平年比125%）。	湊地区の棒受網・すくい網の漁獲量は0.2トンであった（前年・平年の漁獲なし）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量はシラス主体に23トンで、前年・平年を下回った（前年比10%、平年比10%）。

注：「前年」は2022年11月～2023年1月、「平年」は過去5年の平均値。

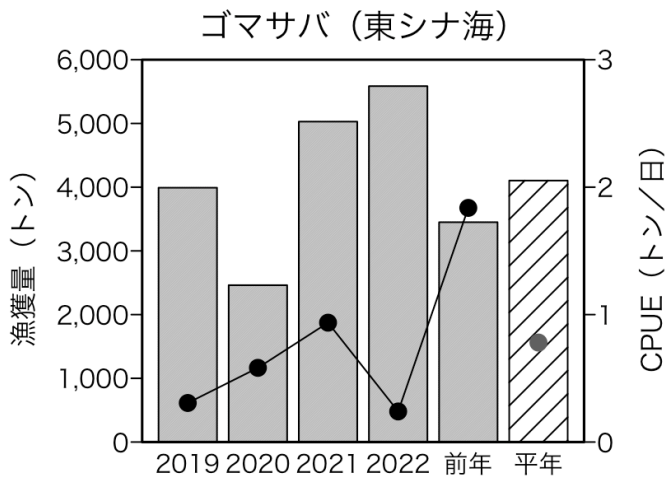
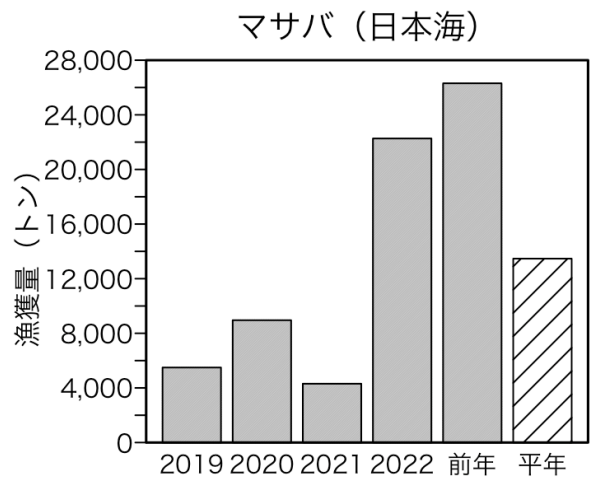
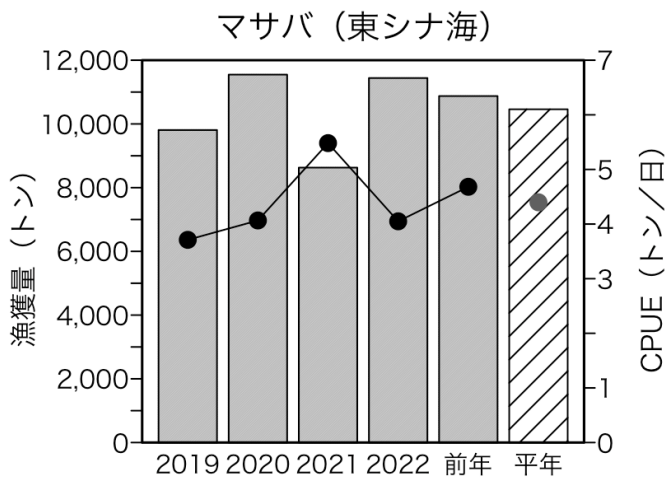
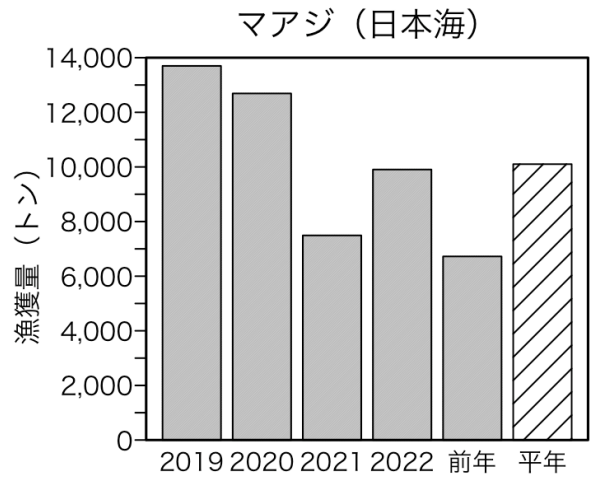
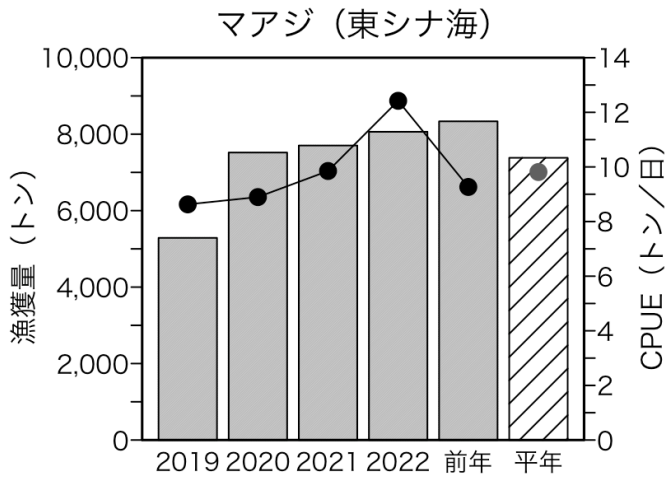
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2023年11月～2024年1月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は101トンで、前年・平年を下回った（前年比55%、平年比49%）。	漁獲量は12トンで、前年・平年を下回った（前年比10%、平年比6%）。	漁獲はなかった。
鳥取	漁獲量は2,366トンで、前年・平年を上回った（前年比131%、平年比140%）。	漁獲量は10,252トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比110%、平年比165%）。	漁獲はなかった。
兵庫	漁獲量は19トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比150%、平年比77%）。	漁獲量は2トンで、前年・平年を上回った（前年比466%、平年比128%）。	漁獲量は0.003トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比161%、平年比0.3%）。
京都	漁獲量は104トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比78%、平年比90%）。	漁獲量は8トンで、前年・平年を下回った（前年比8%、平年比15%）。	漁獲量は0.2トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比279%、平年比13%）。
福井	前年・平年を下回った（前年比50%、平年比56%）。	前年・平年並みであった（前年比81%、平年比97%）。	平年を下回った（前年の漁獲なし、平年比0.4%）。
石川	前年・平年を下回った（前年比26%、平年比18%）。	前年・平年を下回った（前年比41%、平年比32%）。	前年を上回り、平年を下回った（前年比1,169%、平年比31%）。
富山	漁獲量は146トンで、前年・平年を下回った（前年比23%、平年比42%）。	漁獲量は103トンで、前年・平年を下回った（前年比15%、平年比25%）。	漁獲はなかった。
新潟	前年・平年を下回った（前年比50%、平年比32%）。	前年並みで、平年を下回った（前年比120%、平年比71%）。	漁獲はなかった。
山形	漁獲量は12トンで、前年・平年並みであった（前年比110%、平年比95%）。	漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比55%、平年比54%）。	漁獲はなかった。
秋田	前年・平年を上回った（前年比169%、平年比129%）。	前年・平年並みであった（前年比85%、平年比104%）。	前年・平年を上回った（前年比675%、平年比579%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は34トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比93%、平年比51%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は242トンで、前年・平年を上回った（前年比138%、平年比162%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は26トンで、前年・平年を下回った（前年比14%、平年比13%）。

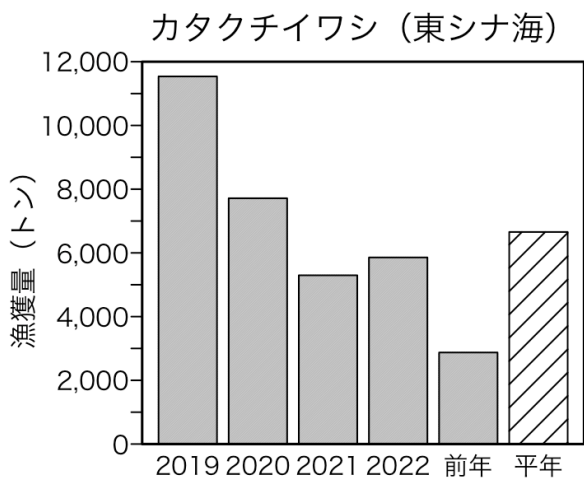
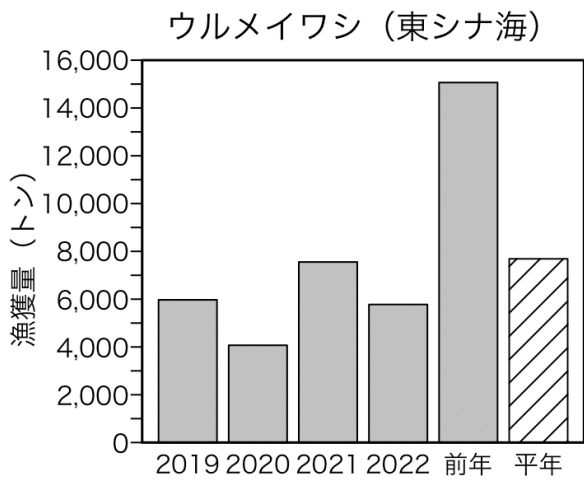
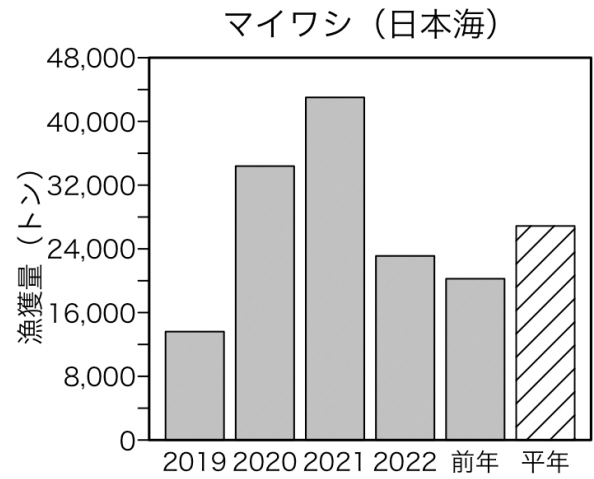
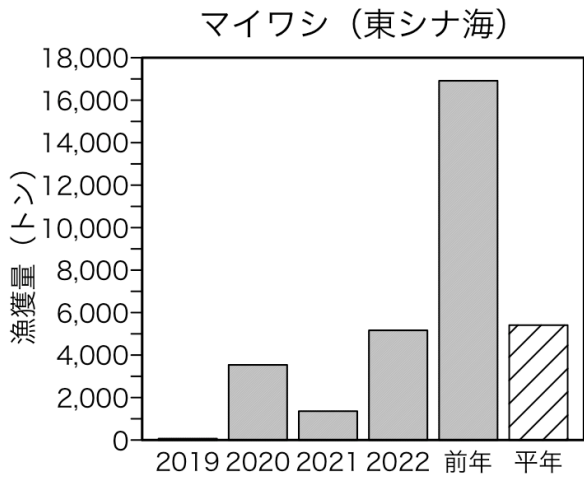
注：「前年」は2022年11月～2023年1月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網漁業の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図（いわし類）

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所